

巻頭言

帰国子女教育を多方面から論じよう

会長 藤澤 皖（千里国際学園大坂国際文化中学校高等学校長）

今から20年以上も前になるであろうか。文芸春秋に「拝啓文部大臣殿」と、当時のTBSニューヨーク支局長の北沢淳二氏が、海外にいる日本人の子ども達の帰国後の不安について訴えた。その後、間もなく海外子女教育研究協議会が設置され、その提案を受けてICU高校や同志社国際高校が設置されたり、海外の日本人学校も整備されてきた。それでも、欧米の教育関係の方には不可解なのか、「帰国子女教育問題とはどのようなことか」とよく尋ねられた。日本では、なぜ帰国子女が問題になるのかということである。

私自身、ICU高校の設置準備の時から、この問題にかかわったのであるが、初めにあれこれ想定していたことより、実際に帰国生徒たちに接するようになってから認識が変わった。帰国子女に問題があるかのようにいわれているが、わが国の教育の側に問題があるのではないかという認識に、である。40人以上の学級での画一教育、管理教育、詰め込み教育の中に、欧米の個人尊重の教育を受けた生徒が適応できるわけがないのである。

それでも、帰国子女がマイノリティであれば、折角芽生えた個性を抑えてでも、「自分が無くなってしまおう」と叫んでいても、わが国の学校生活に融合していかなければならないのか。

千里国際学園創立のため関西に来て間もなくの90年に月に、川端末人先生の提唱で「帰国子女教育を考える会」が誕生した。帰国子女受け入れ現場の小中学校や高校の教師はもとより、大学の研究者、海外進出企業の教育相談を担当されている方、海外日本人学校・補習校で勤務されていた方、帰国子女の保護者、それに帰国子女自身など、いろいろな立場から関係している人達が参加して、一緒にこの共通問題を話し合おうという会である。首都圏では大きすぎて集まりにくい人達が、この関西では集まり続けている。同じような仕事に携わっている人達との連携はもとより、専門受け入れの私立の中・高だけでは把握することが困難な領域、公立の小・中学校での状況、企業の動き、帰国子女自身の体験、保護者の悩み、研究者による分析など、多角的な視野からの章見をうかがうことが可能になっている。学会的研究集団とはいえないかもしれないが、共源問羅について立場の異なる人達の見解を確認できるということは、私の情報をより豊かに、そして確かなものにして行く上にプラスになっていることは間違いない。

それに、それぞれの職場・学校では、マイノリティであるかもしれないが、このように輪を作ることによって、より自信をもって行動することが可能になるのではあるまいか。そして、このような輪が大きくなれば、帰国子女教育を考えることが、日本の教育のありかたにまで改革を迫る契機となっていくことを信じた。

坂田直三前会長のもとに、まとめあげた「異文化体験促進のために」という冊子も、そういう意味で意義のある成果であると思う。これからも帰国子女教育や学校教育のあり方について関心のある方たちに積極的に呼びかけてこの輪を広げたいものである。